

同窓生シリーズ

35



第19回生 斎藤 友子

武蔵野音楽大学器楽科ピアノ専攻卒業。日本音楽著作権協会会員。在学中はクラシックを幸島仔緒子氏に師事。また、在学中より八城一男氏に師事してジャズ・ポピュラーピアノを学ぶ。1980年代前半より作曲活動を開始。叙情・情景的なオリーブ風の音楽ジャンルを築く。オリジナル作品集CD『風』(1990)、『ハンブルグの情景』(1994)を発表。作曲・演奏活動のほか、ピアノ教室・シュヴェスターを主宰し、音楽教育にも力を注いでいる。

〈新宿高校〉

群衆に混ざりたらず私の前を、一人の男が疾風の様に軽々と新宿駅南口方面に駆け抜けて行った。昭和三十九年東京オリンピック。その男は、ローマ大会マラソンの覇者アベベ。折りしも日本が高度成長期に向かつて飛び立たと勢いづいたまさにその頃、私は新宿高校に入りました。高校一年生の時、東京オリンピック。アベベが目の前を駆け抜けたわけです。

通学時、交差点を斜めに横切るルール違反者がいないか、あの二本線の学生帽をかぶって来ない

男子生徒がいらないか、と校門あたりでチェックする先生。当時の先生方の純粋さ、個性の強さは抜群。先生、生徒と入り乱れ、笑い、泣き、騒ぎ、今思うに本当に思い出色の濃い三年間の新宿高校生活でした。

〈私〉

高校に入ったとたん私は馬鹿になってしまったのでしょか？ 中学時代の栄華はいずこ、全くついて行けず、完全に落ちこぼれ。通信簿に赤い数字をみつけゾッとしたり、度々、活路を戸山戦、校長杯(クラス対抗)の競技会に見出しました。

私のいるクラスはいつも優勝。三年間に得た優勝記念バッジは数知れず、小銭入れにギューギューにつまるといふ成果でした。学業の劣る分、運動神経は秀でていました。「こんな成績では」と頭をかかえる先生を悩ませた。三才より続いていたピアノで勝負。スルリと武蔵野音楽大学ピアノ科に入学致しました。心配して下さっていた数学の中心先生「人間には取柄というものがあつたのです。フーン。」のコメントにはギャフンと致しました。大学受験でお世話にな

なったピアノの先生が「貴女って勉強良くてできるのねー、学業成績トップ入学よ」とお話しして下さった時、又ギャフン。教訓。小さなひとりのわくの中

で絶対己を判断してはならない。

〈ピアノ〉

そしていよいよ始まった私のピアノ人生。直ぐ大問題に遭遇。ピアノの先生に選んでいただく曲に手が入らない。詳しく言うと、ヨーロッパの大作曲家達はどうやら巨大な恵まれた手をしていたようで、彼等の書く音世界を演奏する為には、それ相応の大きな手が必要なのです。私の手はとて

も小さい。指も長くない。指と指との間が開かない。努力、練習以前の問題なのです。届かないものは届かない。なんとか音を省きながらクラシック音楽はアプローチ致しました。そんな時、目をつけ

たのがジャズ。むかしからあの独特な響き、リズム

ムに興味があつたのです。ジャズは規制の楽譜通りではなく、音を創って行く世界でした。大変気に入りました。ジャズ理論もお勉強しました。来日アーティスト達の演奏もよく聞きに行きました。そして私は考えました。「待てよ友子、アメリカには神技とも言うべきテクニックを持った天才ジャズマン達が自由闊達に自己表現している。それも、ものすごい人数。皆、皆、スゴイ。なにも今さら、私がノコノコとジャズを

「そんな事を思いつつもピアノに向かつていたあの日、私の手は自然にある曲を弾いていました。私が放った最初の音、曲、

「風」。次から次へと色々な曲を思いつくようになりました。ある時は自然に鍵盤上で、ある時はフット思いついて、私はアコースティックの響きが好き。

た音をみつけ「新平家物語 絵巻」(二台のピアノとヴァイオリン)を作曲。安曇野を旅した時出会ったモニュメントから抒情組曲「八面大王」(二台のピアノ)を作曲。ある美しい天界の詩を読んで組曲「天使」(ピアノとハーブ)を作曲。妹が十三年住んでいたドイツのハンブルグを音に、「ハンブルグの情景」(ピアノとクラリネット) etc. 現在、童話絵本「おきな木」(ピアノとヴァイオリン)を作曲中、「シルクロード」(二台のピアノとヴァイオリン)も作曲中。そしてそして私の様な小さな手の人でも悩まず楽しめるピアノ曲集「花」を作曲中。

人間が生きてくるとは、神様が与えて下さったこの命を自分にしかできない事で生かすこと。いかなる状況に会おうともあきらめぬ事、光を見る事。そしてどこまでもどこまでも自分を信じる事だと思っております。

吉川英治作の「新平家物語」の文章の奥に隠れてい